

案内絵ハガキから見た貴重書展示会のイメージ（4）

『二人の偉大な日本紹介者 ハーンとモラエス』

柴田 佳織

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新しい場所での生活には不安もあると思いますが、多くの発見もあるでしょう。さて、今回は日本で暮らし、日本を発信し続けた外国人についての展示会、「二人の偉大な日本紹介者 ハーンとモラエス」をご紹介します。この展示会は、ハーン没後100年、モラエス生誕150年に当たる2004（平成16）年に開催されました。

ラフカディオ・ハーン（1850-1904）はアメリカでジャーナリストとして活躍していましたが、1890（明治23）年に来日。松江や熊本などで英語の教師をし、松江の娘・小泉セツと結婚しました。その後は神戸で新聞記者となります。1896（明治29）年には日本に帰化し、小泉八雲と名乗りました。広く国内を旅し、晩年まで日本の文化を伝える本を出版しています。

ハーンと言えば「耳なし芳一の話」、「雪女」などの日本の怖いお話を英語で書いた、というイメージが強いと思います。しかしハーンが伝えたかったものは単なる怪談ではなく、その中にも含まれる、日本の文化と日本人の内面ではないでしょうか。『東の国から』に収められている「勇子―追憶記」では、1891（明治24）年の大津事件後、犯人に代わって罪を詫び自決した女性（後に畠山勇子と判明）に深く同情し、勇子の死の直後の心理と行動を想像から小説化して書いています。

一方ヴェンセスラウ・デ・モラエス（1854-1929）はポルトガルで生まれ、後に海軍に入ります。初めて来日したのは1889（明治22）年で、その後も武器購入や公務のためにたびたび長崎、神戸、横浜などを訪れています。1898（明治31）年にポルトガル副領事館の領事代理として神戸

に赴任し、1900（明治33）年にはヨネと同棲を始めます。しかし1912（大正元）年にヨネがなくなり、翌年領事館を辞めて徳島に移りコハルと暮らしていましたが、そのコハルにも先立たれてしまいます。

モラエスは日本の歴史や文化について多くの本をポルトガルで出版しています。唯一日本で出版されたのは『茶の湯』で、和紙が用いられ、宇治の茶摘みの様子などの美しい挿絵も入れられています。またモラエスも『日本夜話』で、大津事件で自決した畠山勇子の墓を参った話を書いていきます。

ハーンとモラエスは、実際に会うことはありませんでしたが、同じ視点から日本人の心を見つめていたのではないのでしょうか。明治時代、開国したばかりの日本を訪れ、世界に日本の歴史や文化を紹介したハーンとモラエス。日本の国際的な発展に貢献した二人の努力を私たちは忘れてはならないと思います。



展示会の案内絵ハガキや目録は、検索コーナーの横に置いてあります。また、目録は図書館のホームページからもご覧いただけます。読書や調べ物の息抜きに、ぜひご覧ください。

しばた かおり（2009年度英米語学科卒業生）